

ご挨拶

本日はわたしどもの演奏会にお越しいただきありがとうございます。演奏者一同、心より御礼申し上げます。

当初は2020年 7 月に予定されていたこの演奏会ですが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、延期の判断を余儀なくされました。練習のために集まることもままならず、1 年以上にわたって活動できない期間を過ごしながらも、オーケストラの再開を模索してまいりました。演奏会の準備、開催にあたり、桑田さん、新倉さんをはじめ、多くの方々にご尽力とご助言をいただきました。ようやく迎えることができた本日の演奏会では、それぞれの想いを添え、オーケストラ音楽の魅力や醍醐味を存分にお届けできるものと楽しみにしています。どうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

(総務 武井 出)

指揮

桑田 歩



Ayumu Kuwata

土浦市に生まれる。3 歳よりヴァイオリンを、8 歳よりチェロを父、桑田 晶に手ほどきを受ける。東京音楽大学を経て1987年にウィーン市立音楽院に留学。第10回霧島国際音楽祭にて特別賞を、イタリアのキジアーナ音楽院にて最優秀名誉賞を受賞。チェロを堀 了介、J. バイロフ、D. シャフランの各氏に、室内楽を R. ブレンゴラ氏に師事。1991年に帰国。群馬交響楽団及び新星日本交響楽団（現東京フィル）の首席奏者を歴任し、定期演奏会等にてソリストとしてもたびたび出演する。第68回日本音楽コンクール作曲部門の作品演奏に対して委員会特別賞を受賞。読売日響、東京都響、新日本フィル、東京響、大阪フィルなどの客演首席奏者を度々務める。1999年よりNHK交響楽団のチェロ奏者に就任し、2020年に退団するまで次席奏者および首席代行奏者を務めた。

室内楽奏者として、またN響のチェリスト 4 人で結成された《ラ・クアルティーナ》のメンバーとして20枚近くのCDをリリースしている他、ソロ作品集《ヴォカリーズ》《メロディー》《ポーランドの歌》の 3 枚をリリースし、いずれも高い評価を得ている。また指揮者としての活動も多く、近年では東京ジュニアオーケストラソサエティ、ブルーメン・フィル、浦安シティオーケストラ、Beseeltes Ensemble Tokyo などの指揮を務め、2014年に行われたプロカーンフィルの公演ではアッペルモントの『カラーズ』（オーケストラ版）の世界初演の指揮をしている。2019年には品川区民管弦楽団とブルックナーの交響曲第 8 番を演奏し多くの話題を呼んだ。筑波ジュニアオーケストラ音楽監督。昭和音楽大学客員教授。新日本フィルハーモニー交響楽団客員首席奏者。

チェロ独奏

新倉 瞳



Hitomi Niikura

桐朋学園大学音楽学部を首席で卒業、皇居桃華楽堂新人演奏会に出演し御前演奏を行う。その後スイスへ渡り、パーゼル音楽院ソリストコース・教職課程の両修士課程を最高点で修了。これまでに毛利伯郎、堤剛、T. デメンガ、M. ツェラー（バロックチェロ）の各氏に師事。国内外での受賞歴も多数。近年では第18回ホテルオークラ音楽賞、第19回齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。現在は Camerata Zürich のソロ首席チェリストとしてスイスを拠点に活躍する中、司会、番組ナレーション、ドレスのプロデュース等、活動の幅を広げている。使用楽器は、宗次コレクションより貸与された Giovanni Grancino（1694年製）。

プログラム・ノート

ブラームス：悲劇的序曲 二短調 作品 81

1880年にオーストリアの避暑地バート・イシュルにて完成。ブラームスみずから「ひとつは笑い、もうひとつは泣く」曲であると友人に宛てて書いているように、同時期に書かれたもうひとつの演奏会用序曲である『大学祝典序曲』（作品 80）と好対をなす。

1879年にブレスラウ大学から授与された名誉博士号への返礼として書かれた『大学祝典序曲』は、学生の酒飲み歌をいくつも引用したユーモアと皮肉あふれる「笑う」曲として、場違いな旋律に壮麗なオーケストレーションが施された愛すべき傑作である。

対する『悲劇的序曲』はどうか。「泣く」曲といっても、お涙頂戴とばかりに聴き手にあからさまな感情移入を誘うような音楽ではない。曲名に掲げられたとおり、「悲劇」のもつ劇的な性格、すなわち張り裂ける悲痛の叫びや襲いかかる艱難辛苦、叶わぬ想いの吐露やひと筋の希望の光など、舞台上で生起するできごととともにもたらされる感情が、音楽のかたちでみごとに昇華されて、聴き手の心を抉り、感情を揺さぶるのである。

冒頭、慈悲なき裁定を告げるかのように音撃が二発振り下ろされ、不気味な静寂からこの「悲劇」は動き出す。悲痛な叫びに終始する殺伐とした短調部分と、それを慈しむような美しくも切ない長調の旋律という対比からなる主部。そして厳粛なフガートを中心として全曲にシンメトリーな構造をもたらす、淡々とした足どりの中間部。緊密な構成と重厚な音響によって表されるのは、具体的な物語や標題などの必要ない、「悲劇」そのもののアイデアである。

シューマン：チェロ協奏曲 イ短調 作品 129

1850年 10 月に作曲。同年 9 月にドレスデンからライン河畔のデュッセルドルフに拠点を拠点を移し、音楽監督として管弦楽団・合唱団を率いる立場になったシューマンは、熱烈な歓迎を受けたこの新天地で創作意欲に火がついたのか、一气呵成に本協奏曲を書き上げた。その勢いはとどまることなく、さらに翌 11 月いっぱいシューマンは交響曲第 3 番『ライン』も完成させている。翌1851年にすぐ上演にこぎつけた『ライン』とは異なり、この協奏曲が作曲家の生前に上演されることはなかった。

冒頭の旋律が、かつてライプツィヒで盟友だったメンデルスゾーンの交響曲第 3 番『スコットランド』の冒頭と同じなのは偶然ではないだろう。3 つの楽章の取り合わせや全曲が途切れることなく演奏される点はこのヴァイオリン協奏曲を思わせ、かつてデュッセルドルフの音楽監督をつとめていた亡き畏友へのオマージュ、あるいは哀歌のようでもある。

第 1 楽章ではイ短調という調性がかつ甘美な哀愁と、独奏チェロのふくよかな音色とが調和し、感傷的な旋律となって紡ぎ出される。派手派手しい技巧の誇示は抑制され、切なる思いを存分に歌い上げることに力点が置かれている。へ長調に転じた第 2 楽章では、独奏チェロがさらに甘く、やさしく語りかける。そして第 1 楽章の音調の回帰とともに音楽はにわかには切迫し、急速な第 3 楽章へとなだれ込む。これまで伴奏に徹していたオーケストラとも積極的に絡みつつ、チェロの広い音域を駆使した超絶技巧を余すことなく披露したのち、短いカデンツァを挟んでさらに急速なコーダを一気に駆け抜ける。

ブラームス：交響曲第 2 番 イ長調 作品 73

1877年の初夏に、避暑で訪れたオーストリア南部にあるヴェルター湖畔のペルチャッハで着手し、その年の秋に完成。交響曲第 1 番が着手から 20 年を超える歳月をかけて前年の1876年によりやく初演に辿りついたのとは対照的に、わずか数か月で書き上げられた。自信と充足感にあふれた筆致によって、いつそう磨きがかけられた作曲の妙味がふんだんに発揮されている。楽曲冒頭の低弦に示される「レド#-レ」をはじめ、どの楽章も基本となるいくつかのモチーフや旋律が寄せ木細工のように精緻に組み立てられ、変化に富んだ実にさまざまな表情をみせてくれる。

仰々しい序奏もなくはじまる第 1 楽章は、ときに翳りや陰しい表情をみせるも、全体としてあたたかで牧歌的な雰囲気にも包まれている。冒頭のホルンのモチーフはベートーヴェンの『エロイカ』冒頭の遠い残響かもしれない。ときにおだやかに、ときに力強く流れゆく 3 拍子の脈動にのせてあふれ出すいくつもの旋律からは、生涯に300を超える歌曲を残したメロディメーカーとしてのブラームスの得意顔がのぞく。

第 2 楽章は、あてどない不安が憧れや祈りの気配とせめぎあう葛藤の音楽。美しくも行き着く先の定まらぬロ長調の旋律に導かれ、曲想がドラマティックに移り変わる。憧れと不安とがない交ぜになったまま、困惑や焦燥に浮き足立ち、ときにおどろおどろしい雰囲気を湛えつつ音楽は進み、果てなく続く問いかけへの答えを得られぬままに閉じられる。

第 3 楽章はひるがえってのどかな憩いの雰囲気にはじまる。素朴で柔和な流れを咎めるように急ぎ立てる遊戯を 2 度挟みつつ、夢心地にやすらう。

終楽章はハイドンやモーツァルト風洒脱の極致。それまで中庸に徹していた速度の箍をはずし、「アレグロ・コン・スピーリト（快活に、生氣にあふれて）」の言葉どおり、オーケストラが一丸となって生き生きと縦横無尽に駆け抜ける。抑えきれぬ興奮のなか、それまでひたすら「翳り」に徹していたトロンボーンに最後の最後で二長調の和声を高らかに奏でる役どころが与えられ、華々しく全曲が締めくくられる。